

湯向の牧場

口永良部島東部の湯向にある町営の子牛牧場は、1883年から1889年にかけて、羊の牧草地として最初に利用されました。当時日本では珍しかった羊牧の、隣島馬毛島での成功に刺激を受け、島民が政府の支援を受けてこの牧場を立ち上げたのです。

この島を治めていた島津又七（1827－1911）は、湯向の未開墾地が羊の牧草地に最適な地形を提供しており、また軍の羊毛に対する需要から利益を期待できると考えました。伊集院兼盛率いる一団が口永良部牧羊場社を1883年に設立し、その年の六月に明治政府から8,000円の貸付金と175匹の羊を受け取りました。羊の数は1885年までに570匹に増え、1886年までには750匹まで増えていました。しかし、飼料代や輸送費などの高騰のためにこの会社はすぐに廃業となりました。彼らはまた台風の影響や口永良部島の辺りな立地という課題にも直面しました。1889年にこの牧場は閉場し、公売にかけられました。その後、中央政府は土地を開拓するため農業植民地をつくり、人々が南の奄美大島や喜界島から湯向に移住しました。

その後間もなく、この地は子牛牧場に変更され、現代まで栄えていました。しかしながら、2015年の噴火により子牛や他の家畜の避難が余儀なくされ、この牧場の活動は衰退しました。